

甚い意氣な符牒を付た物で、紙屑を拾ひに來たが、襪襪襪片れかと思ふて引つ掛けたのが、小さい男の首筋で、竹の先に付いて上つて來たので

「ア、吃驚した。コリヤ何や、二三日暖いと思ふたら、こんな物が發生するのか」

「俺しは人間だす」

「ア、貴君人間だすか、とうない小さいお方だすなア」

「今向ひ側から投られて此處へはまつたんや」

「ア、さうだすか。それは危険ない事で、もし川へでも陥つたら死んで仕舞ひますがな」

「ヘイ誠に有難う。貴君は生命の恩人だす、何れ改めて御禮に参ります」

「イヤ夫れには及びまへん」

小さい男悄然として我家へ歸つて参りました。

「喉、今歸つた」

「オ、御歸り、何うしてやつたんや、甚い顔の色が悪いが土が付いて汚れて居る。ハ、ンあんたは相撲が好きやのてんと相撲を取つて投げられてやつたのか」

「阿呆云へ、相撲取つたんや無いわい。芝居を見に行つた



とんてん
きんてん

な、着物が甚う
輪替屋の小僧さ

ら表方が投り出

しよつたのや」

「マアあぶない事はいな、ヨウ怪我をせなんだ事はいなア、

マア怪我をせぬのが利益物やと思ひなはれ」

「喉、私は腹が空つてゐるね、飯を喰はして」

「誠に濟まんねけれども、今チヨット手の放せぬ用事をして居るよつてに、あんた一人で御膳を出して御飯を食べてとう

「コラ馬鹿にするない」

「今妾が譯を云ふてゐるやないか、手が放せぬと」

「飯位一人で喰ふけれど、お櫃が米櫃の上に上げてあるので

手が届かぬわい」

「アーサウ、是れは妾が悪かつた、勘忍しとう」

「喉ア、私モウ飯喰やへん」

「マア、癪癪持ち。何時も腹を立てたら御飯を食べてやない。ア、カウ仕なはれ、あんたが出てやつた後で隣の甚平はんが來やはつて、大將が家に居るなら遊びに御越しと云ふてやつた。甚平はんそこへ行つて、機嫌を直しといなはれ」

